

二つの北国をつなぐ 架け橋 —フィンランドで感じた 共創と信頼の文化



三浦 篤 (みうら あつし)

前・在フィンランド日本国大使館 経済班長一等書記官
国土交通省北海道開発局旭川開発建設部道路設計管理官

1995年北海道開発局入局。帯広開発建設部、本局、札幌開発建設部、旭川開発建設部、網走開発建設部、留萌開発建設で道路技術者として従事したのち、2022年3月から2025年3月まで、在フィンランド日本国大使館経済班に所属し、フィンランドにおける経済関連全般を担当。
2025年4月から現職。

はじめに—森と湖の国、フィンランド

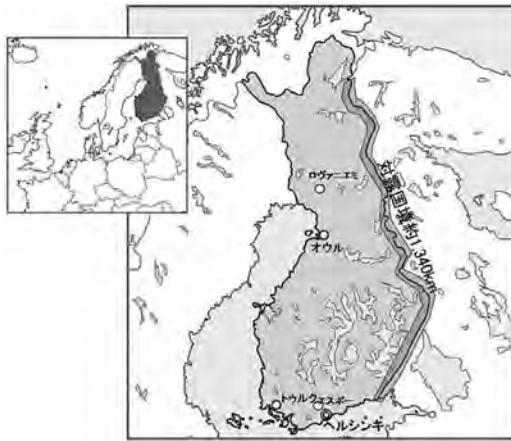
北欧の森と湖の国、フィンランドは、国土の約8割が森林に覆われ、18万を超える湖が点在します。人口は約560万人、面積は日本の9割ほどです。ロシア、スウェーデン、ノルウェーと国境を接し、バルト海に面する北の国です。2023年には北大西洋条約機構(NATO)に加盟し、安全保障の新たな枠組みを構築しました。教育やデジタル分野では世界をリードし、国民の幸福度は8年連続で世界一です。

日本とは1919年に外交関係を樹立しました。近年はデジタル、グリーン、防衛など幅広い分野で連携が進み、両国は「戦略的パートナー」としての絆を深めています。首都のヘルシンキ(北緯60度)は私の自宅がある旭川(北緯43度)より約17度と北に位置していますが、北大西洋海流と偏西風の影響により、気候が似ており、寒冷地に暮らすもの同士の絆を感じながら、私は2022年春、この国に外交官として赴任しました。

第1章 不安と期待の中での赴任

2022年3月7日、私は国土交通省から外務省に出向し、在フィンランド日本国大使館経済班の班長として新しい任務に就きました。歴代このポストは北海道開発局からの出向者で、私は13代目となります。北海道の先輩方が築いてきた信頼をさらに発展させたという思いを胸に、私は日本の北の大地を後にしました。

当時は新型コロナウイルス感染症の影響が続き、さらにロシアによるウクライナ侵攻が始まった直後でした。航空便は相次いで欠航し、予定していた直行便もキャンセルとなり、急きょロンドン経由での渡航となりました。また、陰性証明、複雑な入国手続き、そして単身赴任——心の中には緊張と不安が入り混じっていました。



フィンランドの位置図

出発前、歴代班長がオンライン壮行会を開いてくださいました。「大使館は少人数。自分が核になる気持ちで」「フィンランドの人々は誠実で信頼を重んじている。時間をかけて関係を築けば、必ず応えてくれる」などの先輩方の言葉が、異国への船出を支えてくださいました。

ヘルシンキに到着したのは、雪がまだ残る3月です。静けさに包まれた街並みは美しく、張りつめた空気に北欧の厳しさを感じました。着任早々、オリエンテーションと業務説明、小規模な体制の中で、経済・エネルギーなど多岐にわたる分野を担当すると聞かされ、未知の環境に身を置きながら、自分がどこまで貢献できるか—その問いを胸に、外交官としての新たな挑戦が始まりました。

第2章 外交官としての最初の挑戦

着任して間もなく、日本のデジタル大臣がフィンランドを公式訪問されることになりました。大使館全体が動くと思っていましたが、実際は主管班が中心となり、わずか数人で、フィンランド政府や企業との会議調整、フィンランドの概要説明の準備、通訳者の手配、現地移動や宿泊の手配など、対応する必要がありました。限られた人員での対応は大きな挑戦でした。デジタル大臣が訪問された際、大使館でNo 2の次席と随行しましたが、デジタル大臣の案内や説明を経済班長の私が対応しました。このような対応は北海道開発局では経験したことなく、これが外務省のスタイルなんだ気づかされました。以降、経済の関係が目的で訪問される国會議員や有識者の対応は、経済班が行うことが基本でした。

第3章 信頼と自立の社会

フィンランドに暮らして感じたのは、社会全体を支える「自立と信頼」の文化です。人々は自らの責任を果たし、他人の自由を尊重します。

医療は完全予約制で、軽い風邪では診察を受けられません。医師もちゃんと休む自由がありそれを尊重していると考えられます。医師からは「休んで回復を待ちなさい」と言われることも多々あるそうです。医師や制度に過度に頼らず、自分の健康は自分で守るとい

う意識が社会全体に根づいています。スポーツ施設はフィンランドには沢山あり、皆さん本当に楽しめています。水泳だけを取り上げても、ヘルシンキと隣町エスボーを合わせて15か所以上の屋内プールがあり、早朝から泳ぐ市民の姿が絶えません。私も仕事帰りに泳ぐのを日課にしていました。高齢者が水中で歩行訓練をしていました。親子連れが笑顔で泳ぐ姿を見て、健康が「義務ではなく楽しみ」として位置づけられているのを感じました。

そして、フィンランド人の心の拠り所であるサウナ。家庭、職場、湖畔—どこにでもあります。裸で向き合い、語り合う場所。サウナでは肩書も役職もなく、人と人が対等に話をします。私も現地の友人に誘われてプライベートのサウナを体験しました。木の香りと熱気の中で交わす会話は不思議と心を開かせ、外に出て冷たい湖に身を沈めると、頭が真っ白になり、心が澄み渡りました。

職場の上下関係は非常にフラットで、若手が堂々と意見を述べ、上司はそれを尊重します。印象的だったのは、2024年12月にオルポ首相が日本を公式訪問された際の話です。東京駅での移動時、首相はスタッフを伴わず一人で現れ、関係者を待っておられたと聞きました。日本側の外務省職員が「こんなロジは初めて見た」と驚いていましたが、フィンランドの政治文化の根底にも、地位や形式にとらわれず、人として誠実であることを強く感じました。この国の政治家は、市民と同じ目線で動き、飾りません。市民も政治を遠い存在と思いません。信頼と対話の上に築かれた民主主義の姿を、私は外交の現場で目の当たりにしました。フィンランドには「シス (Sisu)」という言葉があります。困難に屈せず最後までやり抜く我慢強さ—この精神が国民の根底にあります。冬の長い暗闇の中こそ、人々は静かに耐え、春を迎える姿は印象的でした。

第4章 技術者としての視点

外交の仕事に就きながらも、一応、技術者としての目線で見てしまします。その視点で気になったことの話を数点します。

フィンランドは、自動車よりも、公共交通や自転車

が優先されており、自転車道は冬でも確保されています。また、歩行者の安全を第一に考えられており、歩行者信号は自動車信号よりも先に青に変わり、巻き込み事故を防ぎます。歩行者信号が点滅し赤になるまえに、先に自動車信号が赤になります。日本でたまに見かける、歩行者信号の点滅を確認した直後に、自動車が急にスピードを上げることが一切できません。

鉄道には改札がなく、乗客は自らアプリや自動販売機でチケットを買い、無賃乗車が見つかれば一律100ユーロの罰金がその場で科されます。社会が市民の良識と信頼の上に築かれているからこそ、このような仕組みが機能しています。

街灯も興味深く、空を見上げると光が宙に浮いていくように見えます。実際は照明柱を立てず、建物と建物の間にワイヤーを渡して吊り下げられています。都市景観を美しく保つ合理的な工夫があります。



高円宮久子さまへの説明

印象に残る出来事があります。高円宮久子さまがフィンランドを訪問された際、露岩地形に興味を示され、急きょ私が説明を担当することになりました。橋梁を専門とする私にとって岩盤は専門外。限られた時間で資料を調べ、岩盤の特徴を整理し、説明に臨みました。得意分野であるコンクリートの話を交えながら、「良質な骨材があつてこそ、良いコンクリートができます」「フィンランドの岩石は強度が高く、凍害にも強い。寒冷地でありながら道路や橋梁の劣化が少ない理由は、岩から作られる骨材の品質が影響しているのだろう」と、日本の状況との比較を交えてお話しをすると、久子さまが興味深そうに耳を傾けてくれました。後日、大使を通じて「とてもわかりやすかった」と感想を述べられたと伺い、胸が熱くなりました。

第5章 信頼が生むつながり

コロナ禍が落ち着き始めた2022年6月末、日本人商工会の会合が開かれました。自己紹介の場で、幼いころから水泳を続け、大学では水泳部の部長を務め、インストラクターをしていましたことを話したところ、思いのほか多くの方が「実は自分も泳いでいる」と声をかけてきました。そのことがきっかけで、「日本人商工会水泳部」を発足させることになりました。その後、「テニス部」「スキーパー」「スケート部」「ハイキング部」「ゴルフ部」、そして「サウナ部」まで誕生。以前は飲み会中心だった商工会が、スポーツや趣味を通じて自然な交流の場へと変わりました。仕事の情報交換や相談もしやすくなり、私自身も多くの助けを得ることができました。スポーツという共通言語が、人と人とのつながりを大きくすることを改めて感じました。

外交官の仕事は「人と会うこと」に尽きます。会議や式典だけでなく、現地の方々と信頼関係を築き、情報を得て日本に報告します。言ってしまえば平和的な情報収集、すなわち日本の国益を守るために耳であります。いかに関係者と良い関係を築くかが鍵になります。

フィンランドではレストランでの会食も多いですが、最も心を通わせられるのは自宅に招いてのパーティーです。単身赴任の私は広い自宅ではありませんでしたが、赴任前に習っていた蕎麦打ちを披露し、できたての蕎麦をふるまいました。さらに手巻き寿司を準備すると、ゲストたちは楽しそうに自分で巻きながら味わってくれました。言葉が完全に通じなくても、笑顔と料理があれば心は通います。英語力を鍛える場としても、自宅での交流は大いに役立ちました。



日本人商工会水泳部



蕎麦パーティー

第6章 現場で感じた外交

着任当初、私は海外勤務どころか、英語を使う仕事すら初めてでした。大学を卒業してから27年間、北海道で道路や橋梁の調査・設計・施工・維持管理など、国内のインフラ整備に携わっていましたが、海外旅行と言えば新婚旅行が唯一の経験でした。着任後、英語を前にして正直「自分に務まるのだろうか」ととても不安でした。

そんな私に、当時の大使がかけてくださった言葉が忘れられません。「三浦さんが言ったことで世界がひっくり返ることはありません。恐れずに、自信を持って仕事をしてください」その一言に救われました。自分なりの言葉で誠実に対応すれば、必ず伝わる——その確信が仕事の原動力になりました。

大使館の使命は、「我が国の国益、国際社会の平和と繁栄のため」に働くことあります。大使館というと『海外で困った日本人を助ける場所』という印象が強いかもしれません、それは領事業務の一部に過ぎません。経済・安全保障・文化など、幅広い分野での協力を通じ、日本と世界を結ぶことこそ本来の役割です。

こうした理念を胸に、私はフィンランド北東部・北カレリア地方との連携強化に取り組みました。ロシアとの国境閉鎖により経済が停滞する中、日本、特に北海道や長野との学術・経済・食の連携を深めたいという要望が現地から寄せられていました。私はエゾヤマザクラの植樹や交流イベントを通じて「BIOSYSプロジェクト」の推進を支援しました。



北カレリア州知事含むBIOSYSの主要メンバー

また、毎年大使館最大のイベントである天皇誕生日レセプションでは、日本企業の展示を行い、2年目の2024年には、中国による日本産水産物の輸入禁止を受

け、北海道産ホタテを提供してPRをしました。ホタテは来賓に好評で、フィンランド国内で扱う店舗も増えました。これを機に、フィンランド政府関係者にも日本の水産業の現状を理解してもらうこともできました。



大使公邸での北海道産ホタテPR



水素の魅力をPR（天皇誕生日レセプション）

2025年には、トヨタがフィンランド中部のユヴァスキュラ市で地元と第三セクターと連携し、水素事業によるまちづくりを進めていましたので、私はその取り組みを紹介し、水素グリルで焼き鳥をふるまう試食会を企画しました。政府関係者や企業関係者に参加いただき、日本とフィンランドの水素協力の可能性をPRしました。風力や太陽光などの不安定な再生可能エネルギーが拡大する中、電力の安定供給や貯蔵が課題です。水を電気分解して作る水素は、その解決策として注目されています。ちなみにフィンランドでは昨夏、電力が余ったため電気代がマイナスになった日もあったほどです。

赴任期間中、世界情勢も大きく動きました。フィンランドがNATOに加盟したのは歴史的な転換点でし

た。日本では「フィンランドは、NATOに守ってもらおう」との印象が強いですが、実際は違います。微兵制を維持し、ヨーロッパでも有数の陸軍を持つフィンランドは、隣国ロシアの動向を常に監視しています。むしろNATOにとっては「フィンランドに加盟してもらうこと」が重要だったのです。

着任直後、私は経済アナリストに「ロシアがウクライナに侵攻して、フィンランドは不安では？」と尋ねたことがあります。返ってきた答えは意外でした。「日本の方が危険でしょう。北朝鮮のミサイル、竹島、中国の緊張……他国を心配するより、自国を心配すべきです」その言葉に、私は日本の平和ボケを痛感しました。安全保障を「他人事」とせず、自国の立場から真剣に考える必要があると強く思いました。

第7章 二つの北国をつなぐ

フィンランドで過ごした暮らしの中で、私はしばしば北海道を思い出しました。長い冬、雪景色と静けさ、郊外へ一歩出ると広大な畑や牧草地と白樺林——共通点が多いのです。北カレリア地方との「BIOSYSプロジェクト」を通じて、寒冷地技術や森林資源の活用、観光振興など、さまざまな分野での協力の可能性を感じました。北国同士が知恵と資源を共有し、気候変動と共に課題に向き合う姿勢には、未来の希望があります。

外交官としての仕事を通じて、私は「信頼」という言葉の重みを改めて感じました。フィンランドの人々は約束を守ることを当然とし、相手を信じる前提で行動します。人の言葉を大切にし、互いを尊重する文化があります。その姿勢は、北海道で私が関わってきた地域の人々の生き方とも通じるものがありました。自然と共に生き、厳しい環境で支え合う精神があるからだと思います。

日本の多くの人にとって、フィンランドは遠い国かもしれません。しかし、実際に暮らしてみると、文化や考え方の根底には共感できるものが多くあります。教育や環境対策、地域社会の支え合い、そして暮らしの中にある温かさ——それは日本の地方に通じる価値観です。私は、北海道とフィンランドの関係をさらに深めていきたいと感じています。

第8章 共創と信頼の心を胸に

赴任から3年。外交官としての日々は挑戦と発見の連続でした。異なる文化や価値観の中で暮らし、働くことは簡単ではありませんでしたが、そこで得た学びは何にも代えがたい財産となりました。フィンランドで学んだ最大の教訓は、「信頼こそ社会の土台である」ということです。行政も企業も個人も、相手を信じ、責任を果たし、信頼を積み重ねて社会を成り立たせています。

日本でも、この「信頼の文化」を広げていくことが、今後ますます大切になると感じます。効率やスピードを追い求める時代だからこそ、相手を尊重し、任せ、信じる力が必要です。

外交の本質は「人と人の関係」にあります。国と国との距離を縮めるのは、政策ではなく人の心です。食卓を囲み、スポーツを楽しみ、語り合う中で生まれる理解こそが、眞の外交を支えています。水泳部や商工会の活動、蕎麦打ちのパーティー。そして多くの現地の人々の出会い——それらすべてが私にとって外交そのものでした。

厳しい冬を越えて春を迎える北国の人々は、忍耐と希望を知っています。北海道もフィンランドも、寒さの中に温かさを見出し、静けさの中に誇りを宿す地域です。私はこれからも、この二つの北国の架け橋として、互いの経験と知恵を未来へつなぐ役割を果たしていきたいです。

振り返れば、家族の支え、先輩や同僚の助言、そして現地で出会った多くの人々の善意に支えられた3年間でした。日本とフィンランド、二つの国の友情がさらに深まり、共に世界の平和と繁栄に貢献していくことを心から願っています。



ヘルシンキ大聖堂とクリスマス・マーケット